



水戸 弘道館 正門
平成22年3月31日 撮影・事務局



弘道館 正庁（学校御殿）

知恩 第七号

水戸殉難者恩光碑保存会 会報

新任の挨拶

会長 朝比奈 光一

会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

このたび、大森信英会長の後任として不肖私が会長に就任することになり大変恐縮し、また身の引き締まる思いが致します。今後は前会長の功績を汚さぬよう、会員の皆様方のご協力を得ながら、私なりに誠心誠意努力する所存であります。

今年は、水戸開藩四百年、明治維新以来百四十年の節目の年に当たります。当会においても、これまでに千葉県匝瑳市訪問、慰靈祭の実施、福島県会津の皆様との交流等諸先輩方の活動により、それなりの成果を挙げてきました。

また、最近は当会にとつても意義深いことがありました。

一つは水戸市議会において高橋丈夫議員の質問に対して鯨岡武・水戸市教育長から水戸藩史における天狗諸生両派の扱いを今後は公平に行うと言ふ答弁があつたこと。

二つは株式会社茨城プレスセンター社長・市村眞一氏の著書・歴史本「市川勢の軌跡」が好評で諸生派に対する関心が高まつたこと。

三つは水戸市報に連載の水戸藩史に

について著者の宮澤正純先生が水戸藩幕末時点の天狗諸生の抗争で、「天狗正義、諸生奸賊」と差別すべきではなく、両派とも善惡は無い。と発表されております。

これらの動きは、諸生派関係の存在意義が認識されつつあることを示しています。これまでの水戸藩史においては、皇國薩長主觀、軍國思想の自縛にかられていたところが、多々あつたように感じておりますが、前述のように少しずつ良い方向に向かつている感があります。

歴史は勝者によって作られると言われており、水戸藩史においても、同様なところが多くあると思われ、金太郎飴のように、どこを切つても切り口が同じような気がします。

現在は民主主義国家であり、自由闊達に勉強し発表できる訳ですから、一度切り口を替えてみるのも一考かと思います。

今後も、会員の皆様方と意を一つにして、藩内抗争の扱いを公平な立場で精査し、犠牲者の靈を慰めると共に、私達の郷土が歴史、観光の町として発展することに少しでも寄与できればと思います。会員各位のご協力ご支援の程よろしくお願ひ申しあげます。

以上



水戸藩諸生党鎮魂碑

建碑年月日

平成12年5月28日

建碑場所

福島県会津若松市一箕町八幡弁天下33

建碑者

財団法人 会津白虎隊記念館・敷地内

水戸市 来栖平造氏 及び 水戸仰天会有志

第四期・定時総会の報告

事務局 川上有文

総会に先立ち、全会員に代わり、
参会者全員で恩光無辺碑に献花焼香
参拝したことをご報告致します。又、香
平成18年本会設立以後、事務局
に寄せられた情報によりますと、次
の会員の方々が永眠されました。
物故者氏名 (ご先祖姓名)

市野澤晴孝様、(家老・結城寅寿)

小山泰朝様、(家老・小山小四郎)

石橋敏雄様、(町奉行・富田理介)
佐野哲治様、(目付頭・佐野孫次郎)一沢進様、(文庫役・一沢千蔵)
津田信夫様、(大番組・津田孝之介)来栖平造様 (本会顧問)
平成22年3月16日、水戸市
祇園寺客殿において、平成22年度
第4期・定時総会を行いました。

総会次第書「別頁に記載のとおり、
各議案を審議、満場一致で原案の通
り承認議決しました」とをご報告致
します。

特に今回は、役員人事について、
会長・大森信英氏が、高齢又健康上
の理由により会長を退任することに
なりました。今後は顧問に就任をご
承諾頂きました。

後任会長は役員会にて協議の結果、
現副会長・朝比奈光一氏を推挙し、
本総会において承認頂きましたこと

をご報告致します。

尚、理事・門井貢氏より高齢によ
り役員辞退の申し出があり、役員会
において了承致しましたので併せて
ご報告致します。

お二方には本会発足以来、当初よ
り、本会の運営にご尽力頂きました
ことを厚く感謝申し上げます。

今後とも、健康に留意し過ごされ
まして会の行く末を見守つて頂きた
いと存じます。

又、本年はかねてより計画中の会
津若松市白虎隊記念館敷地内に建立
された(水戸藩諸生党鎮魂碑)前に
於いて会津戊辰戦争・戦没者慰靈祭
を実施致します。

会津若松城をはじめ、戊辰の戦跡
を訪ね、同じ志のもとに戦い戦死し
た水戸藩の人々、白虎隊士や会津藩
の人々も含めて鎮魂慰靈の誠を捧げ
たいと存じます。

詳しいことは別頁に記載してあ
りますのでご参照ください。

多くの皆様のご参加をお待ちし
ています。

議事終了後、

1 顧問・野澤汎先生より
「水戸藩と常総地方の逸話」と題し
講話を頂きました2 会津戊辰戦争の史跡探訪と戦没
者を慰靈する旅について
募集要項の説明がありました3 北埼市八日市場今泉地区に地元
の篤志家により、新しく石碑が
建立された件の報告がありました
た4 「幕末維新水戸有志を偲ぶ会」の
昨秋の研修旅行で、北埼市八日
市場脱走塚を慰靈訪問されたこ
とが報告されました5 季刊誌・日本主義第九号
「近代のあけぼのと水戸藩」
その輝きと陰影に

祇園寺 客殿・総会場



恩光無辺碑

水戸殉難者恩光碑保存会 知恩第7号 会津特集 平成22年5月15日発行

第1号議案 平成21年度行事報告

1 水戸藩国事殉難者慰靈祭を挙行

平成21年9月22日 水戸市祇園寺境内、恩光無辺碑前において
来賓参列のうえ行いました

- 総会 1回 平成21年3月29日 祇園寺客殿大広間において開催
- 役員会 1回 平成21年2月9日 旧県庁三の丸庁舎において開催
- 事務局会 4回 4月17日、6月21日、9月10日、12月7日
- 会報知恩編集会議 2回 4月、10月
- 慰靈祭準備会議 2回 22年度会津若松慰靈旅行計画について
- 会報知恩作成と発送 2回 第5号・5月1日、第6号・11月1日
- 水戸市内・諸生派殉難者個人別・墓所別・明細書を巡拝予定者に配布する 水戸市内諸生派墓所巡拝を中止し、個人の自由参拝に変更する

第3号議案 平成22年度行事計画案

- 現地・会津若松市 白虎隊記念館敷地内に建立された「水戸藩諸生党義魂碑」建立10周年記念・水戸藩国事殉難者慰靈祭を行う
会津戊辰戦争・史跡見学および戦死者墓所・寺院訪問、慰靈参拝する
平成22年10月27日 午前1時30分 慰靈式
この会津旅行については会報知恩第7号に詳しいことを記載し会員に周知する
参加者を募集する
- 第3回定期総会 平成22年3月16日 午後1時30分~3時30分
- 役員会 2回予定 平成22年2月、9月
- 事務局会 隨時予定 平成22年2月、6月、10月
- 会報知恩編集会議 2回予定 平成22年4月、10月
- 会報知恩作成発送 2回予定 平成22年5月、11月

7 中長期計画「参考」

- 平成23年 9月祇園寺において 第3回・諸生派殉難者慰靈法要
- 平成24年 一泊・新潟県西山町灰爪の丘・墓所ほか慰靈参拝
弥彦神社参拝 宿泊予定

第5号議案

役員人事の件

1 会長 大森信英氏・会長辞任の件

大森会長には、本会発足以来多くの困難を乗り越えて、会長を務めてこられましたが、このたび、高齢及び健康上の理由により、任期途中であります。が、本会・会長を辞任することになりました。

平成22年2月8日・役員会において了承し、引き続き顧問に就任頂くことになりました。

2 後任会長選出の件

平成22年2月8日・役員会において協議の結果、後任会長に朝比奈光一氏を推薦することに決定しました。

以上、ご報告致します。

大森信英
前会長



朝比奈光一
新会長

平成22年度 定時総会次第

水戸殉難者恩光碑保存会

とき 平成22年3月16日(火曜日) 午後1時30分より3時30分まで
ところ 祇園寺 客殿・大広間において

- | 進行 | pm1:30 | 事務局・朝比奈泰仁理事 |
|--------|--------|-------------|
| 1 開会の辞 | | 藤山二郎・副会長 |
| 2 会長挨拶 | | 大森信英・会長 |
| 3 住職挨拶 | | 小原宜弘・祇園寺住職 |
| 4 議長 | | 朝比奈光一・副会長 |

5 議事

- | 第1号議案 | 平成21年度行事報告 |
|--------|--------------|
| 第2号議案 | 平成21年度収支決算報告 |
| 監査報告 | 監査報告 |
| 第3号議案 | 平成22年度行事計画案 |
| 第4号議案 | 平成22年度予算案 |
| 第5号議案 | 役員人事の件 |
| 6 閉会の辞 | 藤山副会長 |

7 その他

- 会津戊辰戦争・史跡見学と戦死者慰靈旅行について
- その他

全終了 pm3:30 事務局 朝比奈理事

平成21年度 収支決算報告 21.1.1~ 21.12.31 単位:円

収入の部	内訳	摘要	支出の部	内訳	摘要
初期積込	38,676	初期積込	55,742	初期積込	初期積込
年度会費	139,640	年度会費	74,122	年度会費	年度会費
特別会費	144,000	特別会費	45,246	特別会費	特別会費
任意寄付	90,000	任意寄付	13,410	任意寄付	任意寄付
会員	57,000	会員	11,687	会員	会員
役員会	33,000	役員会	0	役員会	役員会
供養寄付	74,000	供養寄付	7,040	供養寄付	供養寄付
会費	45,000	会費	104,000	会費	会費
会員	29,000	会員		会員	会員
販売収入	3100	販売収入		販売収入	販売収入
合計	450,140	合計	471,727	合計	471,727
差引残高			15,639	差引残高	15,639

初期積込	初期積込	初期積込	初期積込	初期積込
水戸殉難者恩光碑保存会	35,620	450,140	471,727	15,639
東京支所セミナー	5,000	(460,140)	(530,040)	1,000
朝比奈光一賞金	178,000	159,074	5,400	331,674
合計	219,624	758,254	850,167	347,713

平成21年 収支決算第3表 上記のとおり報告致します

2009.12.31 水戸殉難者恩光碑保存会

会長 大森信英

委員会 川上由文

会計 鶴引周一

監査報告
監査の結果、帳類・決算書とも適正であることを認めます。

2010.1.31 水戸殉難者恩光碑保存会

監査 売船勝典

監査 大森信英

第4号議案	収支予算案	21.1.1~ 21.12.31	単位:円
収入の部	内訳	支出の部	内訳
科目	金額	科目	金額
初期積込	15,039	一般会費	145,039
年間会費	120,000	会員費	10,000
会員会費	40,000	会員費	70,000
会員会費	80,000	会員費	40,000
会員会費	40,000	会員費	5,000
会員会費	600,000	会員費	10,000
会員会費	600,000	会員費	10,000
会員会費	600,000	会員費	30,000
会員会費	600,000	会員費	600,000
合計	760,000	合計	775,039
差引残高	0	差引残高	0

前預り金	当期收入	当期支出	当期残高	次期預り金
15,039	760,000	775,039	0	0

会長退任にあたって

大森信英

このたび、私は、健康上の理由により、会長を退任致しました。会員各位には、長い間、本会運営にご理解・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

又今後とも諸生殉難者の慰靈・供養行事は是非継続して頂きたいと念願するものであります。

顧みれば勝てば官軍負ければ賊軍の例え通り、永い間、水戸藩諸生派は賊軍として無視同然の状態にあり、多くの人々は全く関心がありませんでした。水戸藩末の歴史の真実が闇に消えてしまうとの想いから、そうならないよう、心ある先達の意をくみ、水戸藩諸生派国事殉難者慰靈祭を行い、少しでも、その実態を知つてもらうべく努力して参りました。

現状はいかがでしょうか？

水戸藩幕末の血で血を洗う凄惨な抗争は、第九代藩主斉昭公の襲封問題に端を発したが、要因はこればかりでなく、次の諸々の事件が根底にあると考えられる。即ち

1853年（嘉永6年）の米国（）の来航、翌年の日米和親条約の調印、1855年の安政大地震による藤田東湖の庄死、結城寅寿の殺害、

1857年（安政4年）の長崎開港、下田条約の締結「不平等条約」、1858年（安政5年）彦根藩主・井伊直弼の大老就任、日米通商条約の無断締結、

1858年（安政6年）の安政の大獄、徳川斉昭公の永蟄居、一橋慶喜公のご謹慎を始め、家老安島帶刀の切腹、更に、茅根伊予之助、鶴飼吉左衛門の死罪、

1860年（万延元年）関鉄之介等による桜田門外事件と井伊直弼の殺害、1860年（万延元年）、斉昭公の死

1861年（文久元年）東禅寺英國公使館の焼き打ち事件、そして、遂に1864年（元治元年）水戸藩尊皇攘夷激派・藤田小四郎等による筑波山・

拳兵となる。

同年5月、幕府は筑波山拳兵の藤田小四郎等の鎮圧を下命した。

これに呼応して、門闕派の市川三

左衛門等は弘道館の学生を主体とする討伐軍を結城に派遣した。天狗・

諸生と言われるのは、天狗は成り上

がり者とか、斉昭公の威を借りる天

狗という意味であり、諸生とは弘道

館の学生に端を発するものと考えら

れよう。

幕府は宍戸藩主・松平頼徳を水戸へ調停の為派遣したが、武田耕雲斎

等に阻ま天狗派は追討されて北へ逃

れ、大子から敦賀へ西上し、徳川慶喜公の出陣により加賀藩へ投降し、悲惨な最期を遂げたのは周知の事であろう。

一応戦いに勝つたと見られる諸生派も、幕末には形勢が逆転して追われ身となり、市川三左衛門等は会津、北越へ転戦し、会津落城の後水戸城を攻撃したが利あらず、八日市場で戦場の露と消え、諸生派は壊滅した。市川三左衛門は一人戦場を逃れ東京に潜伏中に捕縛され明治10年、水戸長岡の刑場で死罪となつた。

明治初年、武田金次郎が諸生派の人々に無差別に兇刃を加えたのもこの時期であり、諸生派の家族は生きる心地がせず、水戸を捨てて逃げ出す者も多く、ひつそりと息を殺して生活していたと云う。そして後に、

茨城県が成立し県知事となつたのは、山岡鉄舟をはじめ他県人で、治めるためにとっても苦労すると嘆いたと云う。

我々は、諸生派殉難士の行為を顕彰し、水戸藩末の歴史の真実を明らかにし、その靈を慰め、供養することが現世に生きる人々の務めであると改めて想うのである。

主義主張は異なれども、國事に奔走し不運にも敗れ逆賊の汚名のみ残されたが、新しい歴史観により名譽が回復されることを切に願うものである。

明治初年、天狗党政権により諸生派の大多数の家は絶家処分にされた。家名断絶、欠所処分である。せめてもの救いは明治22年憲法発布を機に、家名再興の恩典に浴した事である。しかし、土籍には復したが、他県のように秩禄は与えられなかつたのである。

永い間、本当に有難うございました。

明治初年、天狗派に属した人々、及び中間派の藩士は、一律に10石となり、卒族は5石、となつた後のことである。

常陽芸文・「2006年12月号」より
抜粋引用

水戸家譜代として生き

最後は奸人

★大森氏について
元治元年の動乱後、水戸藩ではしばらく門閥派政権が統くが、門閥派の中心人物を「奸人・かんじん」と呼び、藩政からの追放を命じた藩主あての勅書が下つたことで、門閥派の多くは慶応4年(1868)3月には水戸を脱出し、その後は藩の追討軍に追われる境遇となる。その時、門閥派の鈴木重棟(石見守)、市川弘美(三左衛門)、朝比奈弥泰尚(弥太郎)、佐藤信近(図書)、大森信任(弥三左衛門)の5人は、とくに、「五奸」とされ、追討の対象になった。

その中で、大森信任の先祖は、徳川頼房に始まる御三家水戸藩の前、徳川家康の五男で甲斐武田家の名跡を継いだ武田信吉が病没までの短期間、水戸城主であつた時に来て、その後も御三家水戸藩に仕えたという。信任には、信敬(金六郎)、忠恕(金八郎)、道家、という弟たちがおり、道家は結城寅寿の名跡を継いで結城道家となるなど、兄弟そろつて寅寿との関係が深い。安政3年(1856)に寅寿が処刑さ

れた時、信任と忠恕はその党類として処罰されたが、元治元年の動乱後は門閥派政権の中心メンバーだった。

慶応4年(1868)3月10日夜、忠恕を除く兄弟3人は水戸を脱出し、会津に向かつた。忠恕は同姓大森家に養子入りし、そこの家格によつて要職に就いた。家庭内の事情ゆえか水戸に残つた忠恕だが、3月17日に暗殺される。脱出した3人のうち道家は、5月末の長岡(新潟県長岡市)近くの戦闘で深手を負い、戦没した。信任は市川らと北越戦争を経て会津に入るが9月、陣没。

4兄弟のうち、信敬が最後まで残つたが、明治元年(1868)9月8日

日に明治と改元)10月5日、八日市場の戦いの前日に、現在の千葉県銚子市松岸町付近で、高崎藩兵に銃撃されて死亡。当時、この地方は高崎藩の飛び地領だった。

「一行に降伏の動きがあつて、信敬は弁が立つから、と高崎藩の役人と交渉役を任され、行く途中に後ろから撃たれた、と聞いています」水戸市城東に住む、信敬のひまごの大森信英さんが、こう話す。当時、信敬は36、7歳。3歳の娘がおり、この娘が成人して婿を迎える、家を存続

明治22年(1889年)の、

大日本帝国憲法発布にともなう恩赦で信敬の復権は成つたが、「何しき、諸生一味の子孫ということで、第2次世界大戦が終わるころまでは、ひとりと生活せざるを得ませんでした」という。以上

★朝比奈氏について

朝比奈泰尚の朝比奈家は、初め、駿河(静岡県中央部)の今川氏、次いで小田原の北条氏に仕えた後、徳川家康に引き立てられており、御三家水戸藩には成立の時から仕えた譜代の臣である。

泰尚は執政(家老)として門閥派政権の中枢にあつた。市川勢とともに水戸を脱し、その後は市川勢として行動する。八日市場の戦い(千葉県)で戦死、41歳であつた。その時、養子の泰彙も共に戦死している。

水戸藩には、この泰尚の朝比奈家(弥太郎系)のほかに、七郎衛門系の朝比奈家もあつた。こちらも初めは今川氏につかれており、両系とも同じ家から分かれたとみられる。七郎衛門系も、別ルートだが、当初から水戸藩に仕え、6百石を与えられて奉行や番頭を務めている。

水戸市米沢町に七郎衛門系朝比奈家の子孫・朝比奈光一さんが住んで

いる。

「うちも諸生派、いわゆる、門閥派とされていました」という光一さんは、さらに次のように話す。

「純粹に幕府を守ろう、行動は幕府の命に従う、ということで、弥太郎系も七郎衛門系も、やつてきました」と思います。しかし、尊攘激派の天狗の連中とは相容れず、悲惨な結果となつた。七郎衛門系が幕末を乗り切つて明治の世を迎え、現存しているのは、幕末の当主が江戸詰であり、水戸で天狗派と直接かかわることがなかつたからです」。以上



水戸城 三階櫓
昭和20年8月2日 戦災にて消失
水戸城三階櫓古写真

水戸徳川家と会津、高須松平家との関わり

1 ご三家・ご三卿・ご連枝・ご家門

前沢瑞穂

ア ご三家 徳川家康の9男、10男、11男の系譜

- ・9男 尾張・義直を藩祖とする系譜→徳川家
- ・10男 紀伊・頼宣を藩祖とする系譜→徳川家
- ・11男 水戸・頼房を藩祖とする系譜→徳川家

イ ご三卿 8代将軍・吉宗の次男、4男と吉宗の孫・重好の系譜

- ・田安家 →次男・宗武の系譜→徳川家
- ・一ツ橋家→4男・宗尹の系譜→徳川家
- ・清水家 →吉宗の孫・重好（吉宗の長男・家重の次男）の系譜→徳川家

○ ウ ご連枝 ・松平家、ご三家（尾張、紀伊、水戸）の支藩

- ・水戸家支藩→高須藩、守山藩、府中藩、宍戸藩→松平家
- ・尾張家支藩→高須藩、など他省略→松平家
- ・紀伊家支藩→伊予国、西条藩など→松平家

エ ご家門 ・松平家 ご三家、ご三卿以外の将軍家一族大名

- ・会津藩、桑名藩など他省略→松平家

2 「保科正之」と「会津藩」について

以上は水戸家と縁戚関係にある一部である。この中の「会津藩」の藩祖「保科正之」は2代将軍「秀忠」の4男として生まれた。従ってその家格はご三家、ご三卿に並ぶ名族である。正之は「水戸黄門」やご連枝藩祖らとは従兄弟関係に当たる近親である。

○ 正之は、はじめ武田信玄の娘・見性院の手で養育され、5歳の時、保科正光に託された。寛永6年（1629）江戸に出て、父・秀忠に拝謁した。その後、寛永20年、陸奥国会津23万石を給され「会津藩・松平家の藩祖」となった。

なお、正之の異母妹・秀忠の5女「和子」は、後水尾天皇の女御で、明正天皇の母君となっている。従って、徳川一門の中で、水戸と会津は、徳川将軍家とは言うに及ばず、皇室との関わりも深い。幕末の孝明天皇は、水戸藩と会津藩に絶大の信頼を寄せていた。

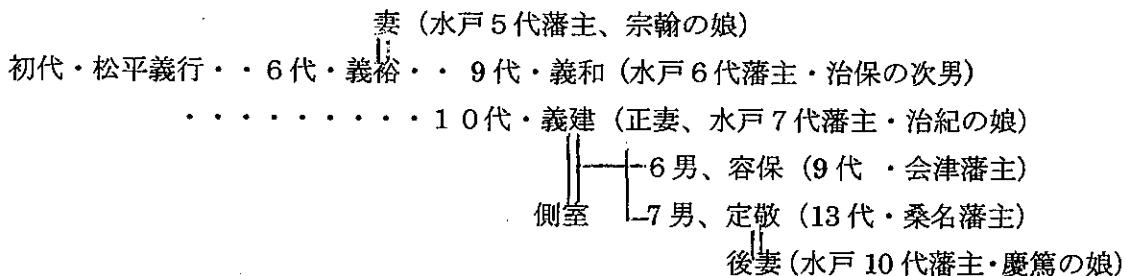
9代「松平容保」の祖父、高須藩9代・「松平義和」は、水戸家6代「徳川治保」の二男であり、「容保」は実弟・桑名13代藩主「定敬」と共に、水戸と血縁関係にある。従って、水戸藩に対しては、近親感と同時に、水戸藩の内部党争には親身になって憂慮していた。万延元年に水戸浪士による「桜田門外の変」直後、激昂した幕閣や彦根藩士らは「水戸を討つべし」との意見も出たが、その武力衝突を回避する努力をしたのは「松平容保」であった。

なお、水戸の徳川斉昭の19男「喜徳」は、会津藩「容保」の養子になっている。喜徳は明治6年、会津松平家を離れ、のちに水戸支藩・守山松平家を相続している。

3 「水戸徳川家」と「高須松平家」との関わり

高須家は、尾張徳川家2代藩主「光友」の次男「松平義行」にはじまる。江戸時代の後期の9代藩主「義和」は、水戸徳川家6代藩主・治保の次男である。義和の次男・高須10代藩主「義建」の正妻は、水戸藩主「治紀」の娘である。

義建の6男が9代会津藩主「松平容保」であり、その実弟7男が13代・桑名藩主「松平定敬」である。



4 「奥羽越列藩同盟」と「諸生党」「会津籠城戦」とその後の行方・・・

諸生党や会津藩は所々で同盟軍と協力して戦っていたが、両方とも正式には「奥羽越列藩同盟」に入っていなかった。

そもそも同盟のはじまりは慶応4年、鳥羽伏見戦争の際、奥羽鎮撫府から仙台藩に対して、「会津を追討せよ」との勅命が出された。しかし、仙台藩には薩長中心の「王政復古」改革に反対するものが多くいた。従って、追討というより、会津に降伏を促すためにその交渉に当たった。だが会津藩の戦意は堅く、交渉は容易に進まず、しばらく足踏み状態であった。先に奥羽入りして、東北諸藩の様子を探査していた長州藩参謀「世良修蔵」は、東北諸藩の消極的態度に激怒し「奥羽皆敵」の報告文を本部に送ろうとした。これが仙台藩士らに発見され、世良は捕えられ阿武隈河原で処刑された。

この事件から仙台藩はじめ奥羽諸藩は、期せずして、薩長軍の敵となった。仙台・米沢藩が中心となり、奥羽諸藩に呼びかけて結束し、慶応4年3月「奥羽越列藩同盟」を成立了。その名目は、会津藩「救援」であったが、輪王寺宮を奉戴し、さらに、会津の堅い戦意に便乗して、政権奪還の夢もあったと考えられる。

しかし、同盟の結束は意外に弱く、仲間藩の降伏が続出し、9月4日。米沢藩が降伏した。明治元年9月14日、西軍は「鶴ヶ城」を総攻撃した。その直前に仙台藩が降伏し、「奥羽越列藩同盟」は完全に崩壊した。その間、会津藩兵と諸生党は協力して西軍と戦い、激しい籠城戦の最中であった。

9月22日、鶴ヶ城落城し「会津」に銃砲声が絶えた。同志「会津」の開城で「諸生党」は行き場を失った。協議の結果、水戸にもどることになった。

諸生党は9月25日会津を出発し水戸へ向かった。その後、10月1日「弘道館の戦い」に続き、10月6日の「八日市場の戦い」に至る、壮絶な運命に遭遇することになる。

以上

会津慰靈旅行を前にして

星亮一先生・著書
「偽りの明治維新」

会津戊辰戦争の真実

はじめに

NHKのテレビ番組「その時歴史は動いた」(2007年10月17日放送)に、初めて会津藩主松平容保が登場した。

義に死すとも不義に生きず
会津戦争 松平容保 悲運の決断
である。この番組はその後3回、全国放送された。

「会津戦争、そのとき歴史はどう動きましたか」

という松平定知アナウンサーの質問に、この番組に出演した私は「会津

(福島県)はみずから正義を訴えるために、全員が死をかけて戦いに臨んだ。そして140年後の審判をあおぐ。そのような気持ちだった」と解説した。これが全国の方々から共感をいただいた。福島県知事、会津若松市長から電話をいただいたのをはじめ、全国各地からメールが殺到した。会津に対する同情の声が圧倒的に多かった。

あのとき、日本人の多くは薩摩(鹿児島県)や長州(山口県)の肩をもつた。日本人には長いものにはま

かれろという風潮が蔓延し、会津は孤立した。いまは見捨てられても、いつかは会津の気持ちを日本人が理解してくれる、そういう思いで、会

津藩兵は戦場に向かい、白虎隊の少年たちも自刃して果てた。

会津の人々は、長い間、朝敵の汚名に耐え、一世紀以上にわたり、その怨念を胸に秘めてきた。若松を追われ、青森の下北半島や北海道に移住させられた人々の末裔には、とくに、その思いが強かつた。中略

会津が長州に抱く怨念は、徐々に薄れつつあるという見方もあるが、「これも、一過性の問題、決定的なことではない」という空気も根強く存在する。

それはなぜか。会津戊辰戦争の真実には、表面的な交流だけではとてもうめることができない、深い溝があるからだった。

明治維新にどこまで正当性があったのか。会津戊辰戦争は日本にどうて必要で正しい戦争だったのか。会津と長州の本当の和解のためには、会津戊辰戦争の真実を検証し、その上に立って溝をうめる作業が必要なのである。

その作業はこれからといつてよい。第一章・悲惨な実態の冒頭に次のようにある

いたい、会津と長州のあいだになにがあったのか。「会津人は戊辰戦争以来、140年間、長州に恨みを抱き続けてきた。これはもう周知の事実である。

戊辰戦争とは、慶應4年(1868)、正月の鳥羽伏見の戦いから、上野戦争、越後戦争、会津戊辰戦争と続き、明治2年(1869)5月の函館戦争で終了する内戦である。会津は鳥羽伏見の戦いから長州や薩摩(鹿児島県)と敵対し、会津戊辰戦争で敗れるまでけつして屈しなかつた。

会津人にとって戊辰戦争、明治維新はどのようなものだったのか。そこには、140年にわたる会津人の屈辱と怒りの歴史があつた。戦争はどんな場合でも悲惨きわまりないものだった。

会津人のこだわりはいくつかある。一つは会津戊辰戦争における官軍という名の薩長軍の殘虐行為である。錦旗、天皇の旗をかかげて会津に攻め込んだ官軍の実態は、帝の軍隊にはほど遠いものだった。分捕り部隊が存在し、薩摩、長州が競つて土蔵を封印し略奪の限りをつくした。

女性も分捕りの対象だった。中略
二つは過酷な戦後処理である。戦死者の埋葬を許さなかつた。戦死者の遺体は犬に食われ、鳥につぶされた。

それにもまして、会津人を苦しめたのは、朝敵、逆賊という汚名だった。幕末、会津藩主は京都守護職として京都にいた。孝明天皇から絶大な信頼を受け、御所に攻め込んだ長州勢を撃退、孝明天皇から宸翰(天皇直筆の文書)を受け取つた。この時攻め込んだ長州は朝敵である。

それがいつの間にか逆になつていた。会津藩を信頼した孝明天皇が奇怪な死をとげてから、幕末歴史は逆转した。薩長が京都を制圧し、会津は京都から追われた。

そして会津戊辰戦争が起つて、会津藩は玉砕した。

会津の郷土史家・宮崎十三八氏は著書・「会津人の書く戊辰戦争」で、官軍を厳しく弾劾した。次のように書いている。

(一般住民を無差別で殺した会津の戦争は大小の違いはあるが、ピカドンの原爆によく似ている。戊辰戦争は討幕の代わりとして会津憎しと、殺戮的好奇心のための行為だつた)と述べ老人と少年の悲劇を例にあげた。後略。以上

平成12年9月14日

水戸・仰天会会報 寄稿文より

会津鶴ヶ城の危機を救う

水戸諸生党の知られざる行動

会津出身 阿部富八

慶応4年8月23日は会津藩にとつては忘れ得ぬロングストーリーとなつた。藩境の母成峠を突破した西軍の精銳3000は、戸ノ口原、滝沢峠を越え23日早朝、遂に若松城下に殺到するに至つた。

若松城（鶴ヶ城）では、婦女子の入城を告げる早鐘が鳴り響き、午前8時頃早くも敵の侵入に備えて、各門は一斉に閉じられた。城下にある16の外郭城門は守備兵が必死にい防備を固めて抵抗したが、多くの会津兵は越後口、白河口等の藩境の防備に出ていて、守備兵は全く手薄であつたうえに、西軍の猛攻を受けて各門とも激戦のすえに、次々に、突破されつづつあった。

若松城の正面玄関にあたる甲賀町各門の攻防は、この日最大の激戦地で、会津藩家老・田中土佐、同・神保藏之介は、ここで壮烈な自決をしている。

この時期、北越各地の戦線から、会津入した水戸諸生党市川勢（400名とも600名とも言われている）は、

城下の名刹瑞雲山興徳寺（豊臣秀吉が「奥州仕置」のため天正18年に会津來訪の折、4泊した臨済宗妙心寺派の寺院）ほか、武家屋敷に宿陣、（宮崎十三八氏談）、このうち150名は会津藩西郷頼母に率いられ冬坂（背炙山）の守備についていた。

8月23日を期して、水戸諸生党市川勢による本格的な救援が始まりました。甲賀口郭門の戦いにも参加したのではないかとも考えられます

が、事実の資料がなく実際のところは不明です。

会津側の資料に、「水戸藩諸生党は西軍が若松城下に殺到するとの報と同時に、若松城三の丸に入城、3門（南門、北方埋門、東門）の守備に就き敵を撃退、城の危急を救い会津藩を感激させた。

8月26日、西出丸防備

8月29日、会津藩の猛将・佐川官兵衛隊に属し、城西の長命寺方面に出撃した。

（籠城戦後の市街戦では最も激戦戦いとなつた「長命寺の戦い」）

9月5日、佐川隊と共に出陣し本郷から大川を渡河して、材木町西裏に集結していた西軍を撃滅、「秀長寺裏、45体）の「戦死墓」には、何人か

住吉河原の激戦」と呼ばれている東軍の大勝利だった。城外で水戸諸生党は奮戦し、勇名を馳せた。

9月7日、佐川隊が、水戸諸生党を合せて1000名を率い、面川、弥五島、大内、永野井、高田などの各地で戦い、食糧、弾薬を集めてお城へ届けたが、その後、田島に終結した。とあります。

平成12年5月28日午前11時

私達は、飯盛山麓「白虎隊記念館」前で行われた「水戸藩諸生党鎮魂碑」除幕式に参加させて頂き、全会津吟劍支部連合会々長の大島雄州先生が、この日の為に作詞してくださいださった「戦後述懐」の詩吟奉納を感動しつつ拝聴しました。

水戸藩援軍躍動
鶴城墨石其歎

「水戸武士の奮戦が石垣に刻まれて居るように感じられる」と現在の会津の方々も、幕府方として、犠牲を惜しまず力戦した水戸藩士を限りなく讃え、感謝していただいております。

会津 鶴ヶ城



の水戸藩士が入つていると想像されます。ただ、大変残念なことに、何日、何処の戦いで、どうゆう状況で亡くなつたかは史書類にはこれまで書かれたものは無く、相当な空白部分があり、この面の補完が今後の課題と思います。

水戸も会津も幕末から維新にかけて國を想い郷土を愛するがために、それぞれの立場で自分の信念に命をかけた人々を鎮魂し、後世に語り継いでゆくこと、そして、正しい事實を学び、正しい認識を現代に生きる若人に、未来を生きる孫・子に伝えることが、私達の責務のように改めて感じた次第であります。

以上

福島民友、福島民報より

平成12年5月次のように報道されました。

鶴ヶ城攻防戦に来援した水戸藩兵などの供養のため

水戸藩諸生党鎮魂碑を建立

幕末の水戸藩は尊皇敬幕では一致していましたが、攘夷思想を取り入れた後期水戸学による各種の事件のため、天狗党と諸生党とが激しい抗争を展開しました。諸生党は、御三家のため、徳川家のために戦うのが使命と考え、慶応4年(1868)家老の市川三左衛門ら500人が水戸藩とともに北越戦線で奮闘しました。

北越戦争後、諸生党は会津に入ります。慶応4年8月23日、西軍は鶴ヶ城に怒濤の如く殺到します。城を守る会津兵は実に僅少、この時、越後から帰つて来た水戸藩諸生党的一部200名が駆け付け防禦し、落城の危機を救いました。この救援は実際に会津藩を感激させました。この後も、城の防戦や、勇将佐川官兵衛の部隊に入るなどし、相当数の戦死者を出すなど犠牲を惜しまず活躍しました。

鶴ヶ城開城後は水戸に帰り、水戸城を攻めますが全滅しました。

(水戸弘道館戦争後、千葉県八日市場戦争で全滅した)

水戸「仰天会」では、鶴ヶ城の危機存亡を救うなど戊辰戦争で活躍します。

最後には、水戸で奸賊の汚名を受けたまま敗者となつた水戸諸生党、農兵隊の鎮魂碑をゆかりの地に建立、永く、その供養になればと願っています。

仰天会 協賛者

水戸藩諸生党鎮魂碑は、平成12年5月28日に会津若松市(財)白虎隊記念館敷地内に建立されたのであります。

◆明治元年、戊辰戦争会津若松城攻防戦において水戸藩士は会津軍と共に薩長軍と戦い、次の人々が戦死しました。次の方々が記録に残っています。姓名・次のとおり

岩上彦左衛門 薄井友衛門昌殷 大森弥三左衛門信任 荻昌介君賢 佐々木治兵衛 高田秀三郎 高橋木一郎 高橋与藏 瀧徳太郎 宮田金蔵清広 宮崎弥介 松本辰蔵 江幡義之介 福田義介

寺社役

注釈(原文。漢文)

乾坤にこだまし→天地にこだまする
傷生→生命をそこなうこと
荒煙噴噴→城が炎上している煙
後人→現代の人
其熱藏→水戸武士の奮戦が石垣に刻まれて居るように感じられる

水戸藩諸生派戦没者姓名

明治元年 会津戊辰戦争
東軍(会津軍)対 西軍(薩長軍)
の戦い

戦後述懐
全会津吟劍支部連合会
会長 大島雄州 作

戊辰の警鐘 乾坤にこだまし
激闘傷生 惨然の象
荒煙噴噴 碧天を遮り
会津の山河仰ぎ見ること空し
後人回顧 夢一場

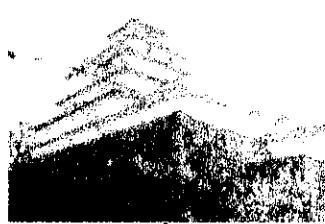
知君るや知らずや 興亡の憂
水戸藩援軍の躍動

鶴城の墨石 其の勲を藏す
馬廻組 合団役 徒目付

寺社役



この戦没者を慰靈供養する



会津 鶴ヶ城